

すべての恋人たちへ

sanukisoba

「好きだったのに、それを伝えることもできずくすぶって消えてしまった片思いって、心の中に残るよな」

彼はそう言いながらグラスの中のアイスコーヒーを飲み干した。12月24日の夜、カップルで溢れる新宿のヴェローチェ。この寒い季節にアイスコーヒーなんてよく飲む気になれるな、と思いながらそれを眺める。

彼はかれこれ20年近い付き合いになる男で、多分私にとっては親の次に長い付き合いだ。そしてもちろん彼にとっても。

今月の初旬に彼は、交際していたバツイチの42歳から別れを告げられ、私は先月に2年間つきあった相手から別れを告げられた。

いわば傷のなめ合いをするために今日、私たちは会ったようなものだ。

昼前に東口で待ち合わせをして、適当に昼ご飯を食べ、喫茶店をはしごし、このヴェローチェは6店目で、私はそれぞれの店でコーヒー、カフェラテ、紅茶、エスプレッソ、ジャスミンティー、ココアを楽しんでいるので若干おなかが重たい。そして、彼が延々と話していた失恋話も重たい話だった。

でも、先月私がフラれたときに私も似たようなことを彼にしているからお互い様。特に不満もない。

ただ、私に言わせれば彼がそんな女と1年間も継続していたことが驚きだ。年齢は大体一回り違う。オバさんが自分に女としての魅力があることをアピールするための小道具に使われていただけなんじゃないの、と彼が交際を始めた頃から思っていたし、今もそう思っているし、フラれた理由だってオバさんがそれに飽きただけでしょ、と思う。

思うだけじゃない。私はさっきから彼にそういうことを言い続けている。

幼馴染だからこその特権みたいなもの。幼馴染がいると三つ子の魂百までという言葉がいかにも真実を表現した言葉が身に染みてわかる。彼は私のような物言いに対して嫌悪感を抱くことはないし、むしろこういう物言いをする人間の方が好きだという絶対の自信。こればかりはたぶん、私以外では彼の親しか知ることのない彼の一面。だから私は遠慮せずなんでも言う。

「好きになっても、相手に恋人がいればその思いは絶対に叶わないだろ？たとえ相手も自分のことを気になっていたとしても。だからさ、タイミングが合うのってとても大切なんだよ。そういうタイミングが合わなくて結局好きって気持ちも伝えられないまま終わってしまった片思いって本当に切ないんだよ。そうならずにうまくいくことなんて貴重なことなのにこんなにあっさり終わったんじゃやりきれないよ」

と彼。

「そもそも恋人がいるのに自分に興味持ってくるような女なんてろくな女じゃないと思うんだけど」

彼の女々しい愚痴にもう少し理解を示してあげた方がいいのかもしれないけれど、私にはそれがどうにもできない。

それにしても彼は今日、会ってから大体9時間も経つのに未だに愚痴がとまらない。そんなにも未練があることに驚いてしまう。そこまで思われるというのはどんな気持ちなんだろうか。それともこれは未練とかではなく、自分の方が優位な立場にたっていると思っていたのにフラれたということに納得がいかないというだけのことなんだろうか。その辺があいにく私にはわからない。

氷が溶けてしまって水割りになったココアを前に私はタバコを啜める。祖父の法事の際に石材屋にもらったマッチでゆっくりと火をつける。マッチ特有の香りとタバコの香りが私の視界を遮る。ほんの少し、世界から幸福そうなカップルが見えなくなる。

彼の愚痴と弱った声、そして私。これはこれで案外居心地が良いものだな、なんて思っていると彼が私にタバコをねだる。箱とマッチを机の上で滑らし、彼に手渡すと彼は1本抜き出し、フィルターをちぎってから火をつける。

「もらいタバコの時くらいフィルター我慢したら」

「軽いタバコってフィルター外して吸わないと呼吸困難になったような錯覚に陥るんだよ」

「今度はセブンスターでも用意しておくよ」

「そうしてもらえるとうれしいね」

「で、さっきからの愚痴はどっちなの。まだ未練があるの？それともフラれた立場におかれたのが我慢ならないってだけなの？」

「後者に決まってるだろ。長い付き合いなんだからそれくらいわかれよ」

「恋愛絡みになるとあんたもだいぶバカになるからね。私にはわからないよ」

「じゃあ前者と後者と半々くらいってことでいいよ」

私の吸っている銘柄は、吸うときには香りが良いけれど、フィルター越しじゃない煙はどこか嫌なにおいがする。その嫌なにおいを吹き散らすように大きなため息をついて私は灰皿にタバコを押し付ける。

「タイミングが合うってのはとても難しいことで、それが叶うからフラれたときのダメージは大きいのかもなあ」

これも彼。

「さっきからそれにこだわるね」

ヴェローチェに入ってから4本目のタバコに火をつける。火をつけて口から放すタイミングを間違えて煙が目にしみる。

「俺にとって忘れられない人が一人だけいるんだよ。いつもいつもタイミングが合わなくて思いを伝えられなかった相手」

「ふうん」

「そういうときは義理でも『どんな相手？』と聞くもんだ。だからおまえは愛想がないって言われるんだよ」

「どんな愛想？」

「そうそう、その調子だよ」

「やればできる子なんだよ」

さっきから彼は何かを言おうかどうか迷っている。それは嫌という程伝わってくる。大体彼はいつもそうだ。本当に言いたいことを言えないでいるとそれがわかりやすい。でも、私や彼の親ぐらいしかそれには気づかないらしい。不思議だ。

こういうときは大抵放っておけば我慢しきれず彼は自分から語り出す。だから私は何も言わず、わざとらしい沈黙を放置して吸い殻を増やしていった。

最近はどうもタバコのペースが早い。自分でもよくないとはわかっているんだけど、なかなか意識してかえられるものでもないようだ。それとも、私がただ単純にそこまで真剣にやめようとしていないだけなのかもしれないけれど。

この直方体にはもしかしたら今まで自分が観たことのない面があるかもしれないと疑いながら私はマッチ箱をひっくり返したり傾けたりしながら観察する。自分の知らない一面を発見できたら世の中の見え方は少しかわるのだろうか。

小さい灰皿が空間を失い、新しい灰皿を取りにいこうか迷い始めた頃、彼が絞り出すような声でつぶやく。

「俺、お前のこと好きだったのにいつもタイミングが合わなかったんだよ」

私が彼といるときに初めて、女の子の気分を味わった瞬間だった。イブの8時にやってくるなんて、サンタクロースみたい。